翻訳の授業

東京大学最終講義

山本史郎

ディケンズから村上春樹まで、
AIにはけっして真似できない、
深い深い思索の冒険。

川端康成「雪国」三島由紀夫「新聞紙」紫式部「源氏物語」芥川龍之介「羅生門」アガサ・クリスティ「オリエント急行殺人事件」上橋菜穂子「精霊の守り人」村上春樹「ノルウェイの森」谷崎潤一郎「蓼食う虫」ルース・レンデル「焼死」ディケンズ「ドンビー父子」「オリヴァー・トウィスト」アーサー・シモンズ「表象派の文学運動」シェイクスピア「ハムレット」ギャスケル夫人「クランフォード」トールキン「ホビット」ヘンリー・フィールディング「トム・ジョーンズ」サリンジャー「ライ麦畑でつかまえて」マーク・トウェイン「ハックルベリー・フィンの冒険」グレアム「たのしい川べ」モンゴメリ「赤毛のアン」

めくるめく
上質。

朝日新書　定価：本体790円＋税

40年の翻訳研究、
魂の集大成。

朝日新書
Asahi Shinsho 768

翻訳の授業

東京大学最終講義

山本史郎

朝日新聞出版

はじめに

英語好きのあなたに質問です。

I wish I knew.

を、あなたならどう訳しますか？

大学に入ったばかりの学生に、「この文を訳してごらん」というと「私は知っていればなあ」と訳します。「なぜそんな風に訳すの？」と尋ねると、「学校で教わったから」とか、「そう訳さないと入試で減点されるから」と答えます。

「君、いままでの生涯の中で、人に向かってそんな風に話したことある？」と尋ねると、「あるわけないですよ」と答えます。「じゃあ、私は知っていればなあって、ようするにどういう意味？」と尋ねると「知らないってことだよ」と答えます。「なんだ、分かってるじゃん！ なんでそう訳さないの？」とさらに追求すると、「そんなの訳じゃないでしょ？」と逆襲されることがあります。

“I wish I knew.”は、例えばエンターテイメント系の小説や洋画の字幕だと、たいてい「知らなかった」というような感じで訳されていると思います。とても自然ですね。ごく日常的なことばです。この訳は、翻訳者が原文を読んできちんと情景を頭に描きだし、その中に入り込んで自分のことばとして発している、生きたことばです。

あなたはどちらがいいと思いますか？
おそらく、何の迷いもなく後者を選ぶでしょう。

では、次にもう少し高級な例をご覧いただきましょう。
イギリスの文豪チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』というファンタジー物語はご存知でしょうか？
今でいうサラ金のような商売をしているスクルージという老人が主人公です。この会社はマーリーという人物との共同経営でしたが、この人は7年前に死んでいます。ところがクリスマス・イヴの夕方、一人さびしく食事をすませたスクルージのところに、このマーリーの幽霊が現れました。
スクルージは恐怖におののきますが、相手がホンモノの幽霊だということを信じようとしません。「夢は五臓六腑の疲れ」ということわざがありますが、食べたものが悪かったので腹具合がおかしくて、そのせいで見えている幻影にすぎないのだと言いはります。

「感覚なんて、腹具合が少しでも悪いと狂っちまうじゃないか。お前なんか、消化できなかったビーフのかけらかも知れんじゃないか！ お前なんか皿になすりついたからしだ！ チーズのはしくれだ！ 生にえポテトのちっぽけな断片だ！」と言った後で、パンチラインを付け加えます。

> There's more of gravy than of grave about you,
> whatever you are!

実直に訳してみましょう。「何者かはしらんが、お前には墓場的なところよりも、肉汁的なところが多いぞ」とでもなるでしょうか。「お前はチーズだ、ポテトだ」などと言ったので、「墓場よりも食べ物に縁がある」という意味内容のことを述べているのですが、grave と gravy というよく似た語を並べたジョークを飛ばしているというわけです。

このジョークを4通りに訳してみました。

a) おまえさんがなんであろうと、グレーヴ（墓場）よりはグレーヴィ（肉汁）のほうが縁がありそうだ。

b) 何れにしてもお前さんは墓場（グレーヴ）よりも肉汁（グレーヴィ）の方に縁がありそうだよ。

c) きみの正体はよくわからないが、墓場のにおいよりも、肉汁のにおいが、ぷんぷんするよ。

d) 何にしても、あんた、恨（うら）めしやより、裏（うら）の飯屋（めしや）に縁があるぞ！

それぞれ何を狙っているか、簡単に説明しておきましょう。

a) は英語の音が近いという情報を伝えることで、ジョークであることを説明している訳です。b) は語の意味を

伝えることが主目的ですが、同時にルビによって音の情報をも表現してジョークであることを読者に教えています。c)は原作でどのようなジョークが仕組まれているかを伝えることはあきらめ、意味を伝えています。d)は原作の意味を離れ、もとのジョークと同じ構造のジョークを日本語で創作して、読者を愉しませようとしています。

さて、あなたはどれがよいと思いますか？

教室で尋ねると、たいてい、b)とd)に票が分かれます。ただ、好き嫌いを述べるだけなら、雑談にすぎません。仲良しクラブのファン投票ならそこで終わってよいのですが、翻訳の授業と銘打つならば、なぜ好きなのか、嫌いなのか、きちんと説明できなければいけません。

b)を推す人は、原作がどのように書かれているか分かるからよい、と言います。これに対してd)を選ぶ人は、原作の読者が笑うところで、翻訳の読者も笑えるのがよい、と説明します。

そしてさらに、b)は「起点テクスト重視」でd)は「目標テクスト重視」だと言えば、これはもう立派な翻訳論です。ただし、残念なことに、多くの議論はこのような学術用語をペタリと貼り付けたところで終わってしまいます。大事なのはその後です。次の段階として、どちらの翻訳を好むにせよ、「自分はなぜそれがよいと思うのか」と自問しなければなりません。そして、自分の判断の背後には何があるのかを考え、自分が無意識のうちに

何を前提としていたのか、というところへと考えを深めることから、本当の学問がはじまります。こうして同じ考えを共有する者たちがどんな無意識の前提をもっているか、あぶり出していくのが翻訳研究であり、文化の研究です。

私は30年以上にわたって東京大学で、主として英語や翻訳について研究し、教えてきました。2019年の３月に退職するのを記念して、親切な同僚の方々や学生の皆さんが「最終講義」の機会をもうけてくださり、これまでの考えをまとめる機会を得ました。そして本書には、日ごろ教室で教えていたことを、最終講義の内容に加えてご紹介しました。

この本は、このような長年の経験をもとに、書かれてあるものを「文法的」に正しく解釈し、辞書のことばで置き換えるのが翻訳だと思っている人の「常識」を破壊し、「英語（外国語）とは何だろう？　翻訳とは何だろう？」という疑問を、きちんと論理的なかたちで、どこまでも深く深く掘り下げていこうと思って書きました。

のろまな私が30年もかかって知り得たことを、すべて皆さんにも知っていただき、皆さんがそこから出発して、ことばや翻訳についてもっともっと深く理解できるようにと願いながら書きました。皆さんの踏み台、跳躍台になれることを目指して書きました。

めくるめく翻訳の冒険に、いざ出発！

2020年5月

山本史郎

翻訳の授業

東京大学最終講義

目次